

健康で文化的な生活

全生連調査から④

多くの市民の生活実態を調べ、憲法25条(生存権)が保障する「健康で文化的な生活」の実現をめざそう。全国生活と健康を守る会連合会(全生連・安形義弘会長)と全日本民主医療機関連合会(全日本医連・藤末衛会長)は、研究者とともに「健康で文化的な生活全国調査プロジェクト」に取り組み、いま

全生連は昨年4月1日から7月14日まで、調査を実施し、3月、中間報告を公表しました。調査対象は、全生連会員世帯から無作為抽出した5025人、有効回収数は3416ケース。全体の8割が60歳以上で、平均年齢は69.1歳です。

プロジェクトに参加する洗足でも短期大学の板倉香子(こうご)専任講師は、調査について「国民の生活実態と住民意識を明らかにすること、健康で文化的な生活とは何かを考察する基礎資料を得ることが目的」と説明します。

本人の年間所得が2



全国調査プロジェクトに参加する板倉香子氏

憲法25条の実現めざして

グラフ1 個人の年間所得(4区分)



世帯の年間所得(4区分)



グラフ2 住宅の種類(4区分)



グラフ3 自分の健康状態



す人は3割弱でした。(グラフ1)

住まいを失う心配をした経験の有無を問うと「ある」が27.3%でした。板倉さんは、民間賃貸住宅に住む人の場合には、それが45.5%と特に高くなる指摘。「住まいは生活の基盤」と強調します。

医療費の支払いに不安を感じている人は約28.2%。家計のなかで医療費が負担だと感じる人は25.5%でした。自分の健康状態は、「あまり良くない」と「良くない」を合わせた50.3%でした。(グラフ3)

過去1年間に経験したことで、新しい

地域社会とのつながり大事

衣類等の購入を抑えた人が52.6%、食費の節約が43.3%に上りました。(複数回答)

普段の食生活に満足している人は56.2%。他方、内閣府世論調査(2018年)では、食生活に満足している人が88.8%です。

泊まりがけの旅行を「ほとんどしない」人は67.4%、旅行しない理由を「金銭的余裕がない」と回答した人は62.8%でした。

近所つきあいについて、男性は「あいさつ程度」付き合いがない「が5割、女性は4割でした。地域活動に参加していない人は男女とも4割弱。その理由として、女性は「時間がない」「体調」「費用」を挙げる人が男性より多く、男性は「友人がいない」「興味をひくものがない」「参加したくない」が女性より多く見られました。

近隣の文化施設に関する問いで、図書館があるか答えた人は88.2%、公民館も同。図書館を利用する人は2割、公民館は3割でした。「生活は充実している」と答えた人は3割。

「健康で文化的な生活」をどう考えるかに関する自由記述では、「健康であることが大事、体調が悪くては何もできない」「男性、37歳、「衣食住に心配や不安がなく満たされている状態。人とのつながり(交流)がある。趣味や関心に時間と費用が使えること」(女性、69歳)、「労働時間がしつかり守られ、家族との時間や友人たちとの交流も遠慮なくできる程度に自由な時間が保障されること」(女性、40歳)などがありました。

板倉さんは、健康で文化的な最低限度の生活について、「これらの結果から、経済的安定や医療体制、教育の保障、労働環境が整っていることはもちろん、地域社会とのつながりがあることも重要なものでは」と分析しています。

(cnn)